

目指す学校像	わからなかったことが わかるようになる学校 わかったことが さらにわかるようになる学校
重点目標	1 確かな学力の育成のための、個別最適な学びの実現と、学ぶ意義を実感できる教育課程の創出(学力向上) 2 安心して安全な教育環境の整備と、豊かな心とたくましい体の育成(安心・安全) 3 学校運営協議会を核とした、学校、家庭、地域における情報共有と行動連携(地域とともにある学校づくり) 4 学校生活の真の楽しさを味わわせることができる授業力と指導力の育成(教職員の資質向上)

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学 校 自 己 評 価		年 度 評 価		学校運営協議会による評価					
年 度 目 標		年 度 評 価		実施日令和6年2月13日					
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等	
1	学力向上に関する取組 <現状> ○学校課題研修の関連アンケート結果から、主体的に学習したり、学び方を自分で決めたりする姿が9割の児童に認められる。 ○学校評価アンケート結果から、デジタル教材の授業での活用について、8～9割の肯定的な回答を得ている。 ○全国学力・学習状況調査の結果分析、STEAMS TIME の実践などから、本校ならではの教育課程を工夫することができた。 <課題> ○学校課題研修の関連アンケート結果から、学習課題を受けて考えたり、自分の意見を積極的に表出したりすることについて、肯定的回答がやや低く、課題がある。 ○学校評価アンケート結果から、家庭でのデジタル教材の活用について、肯定的回答が3～5割にとどまり、課題がある。	・確かな学力の育成のための、個別最適な学びの実現 ・学ぶ意義を実感できる教育課程の創出	① 授業の中に自分で考える時間を確保し、考えたことを豊かに伝え合い、自分の考えを広げるようにする。 ② スタディサプリやデジタル教科書等のICTを研究し、授業の中に積極的に位置づけ、学校、家庭での活用を図る。 ③ 少人数指導、高学年教科担任制などの指導体制の工夫を通して、学び方の自己決定を継続し、より主体的で個別最適化された学習を提供する。	① 授業の中に、自分で考える時間を確保するとともに、考えたことを豊かに伝え合い、自分の考えを広げられるようにできたか。 ② ICTを授業の中で積極的に活用するとともに、家庭での学習でも活用することができたか。 ③ ③学び方を自己決定させる機会をつくり、主体的で個別最適化された学習を提供することができたか。	① 授業の中の考える時間や伝え合う時間については、教員が97%、児童が96%と感じている。 ② 児童はICT機器の活用について、授業では83%が活用していると答えているのに対し、家庭での活用に関する回答は12%だった。 ③ 少人数指導、高学年教科担任制などの指導形態を通して、児童に学び方を自己決定させ、より主体的で個別最適化された学習を提供できたとしている教員が73%だった。	① 全国学力学習状況調査について、分析結果から改善に向けた実践ができたと感じている教員は90%だった。 ② 単元の最初に学習計画を立てることについての肯定的な回答は、教員が95%、児童が93%だった。	A	① 考えさせたり、伝えさせたりする授業形態への意識が高まった。その成果を児童に実感させたい。 ② タブレットの活用については、保護者に多様な意見がある。活用場面を検討し、成果や効果を検証し、結果を伝える。 ③ 保護者から個別最適な学びを期待する声が多い。学び方の自己決定をさらに推進する。	・タブレット端末の授業での積極的な活用を求めていることについては、評価する。 ・タブレットをはじめとしたICTの活用については、適切かつ効果的な使い方について検討を重ねてほしい。タブレット利用の学習で効果が見られないこともあった。また、破損により修繕となり代替機での活用または使用できなくなるという課題も出ており、扱いについても小学校段階での指導を望む。 ・オンライン上での人間関係のトラブルが心配である。当事者同士ではなく、第三者が介入することで、難しい問題となっているようだ。
2	安心・安全に関する取組 <現状> ○安全点検結果を受けて、複数の教職員で確認を行い、必要箇所の修繕を適宜行った。 ○教室掲示を精選したり、中庭の整備をしたりして、学校の環境を整えた。 ○児童がさまざまな関わりの中で、相手の気持ちに立ったり、他者のよさを見つけたりするように意識していることが学校評価アンケート結果から分かる。 <課題> ○タブレットを含めた、学習用具の持ち帰りについて、課題が認められ、家庭でのデジタル教材の活用があまり伸びなかった。 ○昨年度のいじめ認知件数は14件であった。認知したいじめの特徴から、「観衆」「傍観者」をなくしていきたいと考える。	・安全で安心な教育環境の整備 ・豊かな心とたくましい体の育成	① 毎月の安全点検を確実に実施し、不具合箇所の早期発見、早期対応を継続する。 ② ユニバーサルデザインの視点を取り入れた環境整備を進める。 ③ タブレットを含めた、学習用具の持ち帰りを計画的に行うようにする。	① 安全点検における不具合箇所が、次月に持ち越されることはなかったか。 ② ユニバーサルデザインの視点を取り入れた環境整備の効果を確認することができたか。 ③ 発達段階に応じた学習用具の持ち帰りについて計画的に行うことができたか。	① 安全点検を実施し、不具合箇所について早期発見、早期対応をすることについて98%の教員が肯定的だった。 ② UDを取り入れた環境整備について98%の教員が肯定的だが、34%の保護者はわからないという回答だった。 ③ 学習用具の持ち帰りについて、教員は95%、児童は40%、保護者は30%が肯定的な回答だった。	① 学校課題に対して、児童自ら改善する取組を考えさせることができたかということについて98%の教員が肯定的だった。 ② いじめ撲滅に向け、「仲裁者」「通報者」となる勇気を育成できたと感じている教員は95%、いじめを発見したとき、大人に話している児童は82%だった。	B	① 不具合箇所の早期発見、早期対応について高い意識をもって全職員で取り組む。 ② UDについて、効果を検証し積極的に保護者に伝える。 ③ 学習用具の持ち帰りについては、改善が認められるが持ち帰るものが集中する時期がある。 ④ 課題の解決に向けて意見をもてる児童が多いので、積極的に参画できる機会(児童いじめ対策委員会等)を作る。 ⑤ いじめ撲滅に向けて、場面に応じて「定例会」「校内委員会」「臨時部会」を開催して組織的な対応をさらに充実させる。	・上水道の漏水等、施設の老朽化については、学校として適切に対応していた。ただ、学校の周りをみても、改善の余地があるところもある。 ・いじめの対応については、「通報者」というのが児童にとってはハードルが高いのではないかと感じている。成長に伴い、教師に伝えることが悪いことと感じる傾向があるので、継続して啓発してほしい。 ・児童のいじめ対策委員会については、ぜひ実施をしてほしい。小・中一貫教育の視点から中学生の参画も視野に。
3	地域とともにある学校づくりに関する取組 <現状> ○学校公開やホームページの更新などの発信を定期的に行い、保護者や地域との情報共有を行った。 ○学校運営協議会にて熟議を行った結果として、学校・家庭・地域での合同あいさつ運動を年間3回行い、目指す児童像に迫った。 ○学校評価アンケートを見直し、保護者の主訴を明確につかむように努め、組織としての対応を行った。 <課題> ○保護者や地域住民等がさらに「当事者」として学校運営に参画できるように、「つながり」の機会をつくる必要が、学校運営協議会委員から指摘されている。 ○学校公開やホームページなどによる情報発信をさらに充実させることが保護者、地域から求められている。	・目指す児童像を地域全体で共有 ・保護者のニーズに寄り添った学校運営	① 児童が主体的に取り組んでいる姿を、学校・家庭・地域で共有することで、児童に、地域の一員である意識を育てる。 ② 学校・家庭・地域の役割について、学校運営協議会で熟議を行う。	① 2学期の学校運営協議会で児童が参加する場面をつくり、意見交換をすることができたか。 ② 学校運営協議会で、それぞれの立場でできることを考えることができたか。	① 学校運営協議会で児童が実践発表し、発表をもとに今後の重点を「ふれあい」とすることが共通理解された。 ② 熟議に入る際、それぞれの立場でのご意見をいただきたいことを確認することができた。	① 保護者からの相談や訴えに、適切な対応をしていることに対する肯定的な回答は、教員が100%だったのに対し、保護者は82%だった。 ② 情報発信について、教員は85%が肯定的だが、保護者は連絡がわかりやすいが71%、積極的な発信・公開については49%だった。参集できる行事が増えたので、宿泊学習や学年行事の様子をブログで配信した。	B	① 重点である「ふれあい」が具現化できるように各団体等に呼びかける。 ② 引き続き学校運営協議会に児童が参加できる場面を作り、意見交換をする。 ③ 保護者からの相談への対応について、教職員と保護者の意識に乖離がある。組織的な対応をさらに充実させる。 ④ コロナ禍を経て学校からの発信を工夫して学校からの発信をすることで学校からの情報には多様なニーズがあり、効率よくわかりやすい情報発信をする。	・今後の重点である「ふれあい」が共通理解できたことはよい。運営協議会をきっかけとして、自治会でも児童の参画を促すという視点を育てたい。各立場で、次年度以降進めていきたい。 ・学校からの相談や訴えに適切な対応をしていないということではなく、保護者の遠慮が数字に表れている結果だと解釈している。 ・学校だよりのWeb掲載はありがたい。情報発信については、保護者のニーズを調べて、発信する方法や内容を今後検討してほしい。
4	教職員の資質向上に関する取組 <現状> ○校長による教室訪問、各自の授業研究などの研修を通して、教員が自身のこだわりをもって授業を行った。「主体的・対話的で深い学び」に向けての授業改善の意識は9割の教職員が肯定的な回答をしている。 ○特別支援教育に係る研修を通して、全ての教職員がより深い児童理解につながったと実感している。 <課題> ○授業の基盤となる、児童・保護者との確かな信頼関係を構築できる実践力の育成が必要と、日々の取組から教職員は考えている。 ○「わかる授業」「楽しい授業」に向けて、教職員同士が他者への貢献と他者の知見を積極的に活用できるチーム力の育成が必要である。	・真の楽しさを味わわせることができる教職員の育成	① 児童との信頼関係を構築するために、特別支援教育に係る研修会を継続し、正しい児童理解と支援を行う。 ② 学校課題研究を充実させ授業研究を柱とした研究を推進する。 ③ 学期に1回以上、校長による教室訪問を継続するとともに、これまでも実践してきた一人一公開授業を教職員が相互に授業参観を行いながら、積極的に意見交換できるようにする。	① 特別支援教育に係る研修会を実施し、児童の困り感に応じた個別の支援を実施することができたか。 ② 指導者を招聘した研究授業を実施することができたか。 ③ 校長や教職員同士で授業について語り合い、他者への貢献や他の知見の活用をすることができたか。	① 特別支援に係る研修会をとおして、個別の支援が実施でき、正しい児童理解と支援ができたと感じている教員が95%だった。 ② 指導者を招聘した授業研究会をとおして、学校課題研修を進めることができたと感じている教員が92%だった。 ③ 校長による教室訪問で、視点に沿った授業を実施できたと感じている教員が88%、他の職員との相互の授業参観によって他者への貢献や他の知見の活用ができたと感じている教員が95%だった。	① 保護者からの学級間格差を心配する声が少ない。個々教員が指導力を向上させるとともに、学年経営を充実させる。 ② 特別支援教育に係る研修会を実施し、児童の困り感に応じた個別支援ができる力をのばす。 ③ 指導者を招聘した研究授業を実施し、授業力を向上させる。 ④ 年間一人一回を目標とした授業公開を行い、意見交換をする中で他者への貢献や他の知見の活用をする。 ⑤ 研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励を充実させる。	A	・保護者からの学級間格差については、引き続き対応を継続していただきたい。 ・教員がお互いに授業を見あうということ、非常に効果があると思うので、継続して実施してほしい。知見の共有は大切である。 ・教員の個性や特性を生かしながら、活躍の場面を設定できると、児童の深い学びにつながるだろう。 ・特別支援教育については、委員として学ぶ機会があれば参加したい。	

